

## 震災レポート（３）目次

- 1 . 自助・共助・公助
- 2 . 避難所生活からの脱出
- 3 . 視察（頑張れない・・・）
- 4 . 予知（再）

東北支部 吉川 謙造

## 1. 自助・共助・公助

災害発生時には「自助・共助・公助」の3つが連携し一体となることで被害を最小限にすることが必要である。今回の東日本大震災でも、東北地方の例が世界中に報道された。

自助：地震の大きな揺れがきたら、ガスの元栓を閉め、机の下に入る。先生の指示に従って整然と避難する……これは当然として、80歳を越えた老女が、軽々と電柱によじ登った。普段は、やっと歩いている人が、誰よりも早く走って安全なところまで逃げた。普段の訓練にもとづく行動などが自助の基本にある。

共助：外国人の研修生を安全なところまで、津波避難させ、自分は津波の犠牲になった経営者など最後まで他者優先に徹し、自分の職務を守ることで国際親善の役割まで果たしてくれた。男性は女性を、大人は子供を、若者はお年寄りを……、皆が助け合う姿。略奪、買占めはなく、整然とした買い物の行列への割込みもない。列に並ぶ人たちは付近の畑に植わっている野菜には誰も手をださない。スーパーやレストランも便乗値上げをしない……。

これらの行動は、穏やかな国民性、品格と威厳に満ちた姿だと世界中から絶賛された。

公助：緊急時の公助は、津波避難時の避難誘導や、救助などで生命を失った人には消防、警察、自治体の職員の比率が高かった。そして子供たちがその姿に打たれた自衛隊員の献身的な行動もあった。さらに、奇跡のフクシマ50人といわれた原発事故対応従業員の姿。ガス、水道、電気などのライフラインの復旧、道路の確保とガレキの撤去、行方不明者の搜索、医療など、国内だけでなく世界中からの支援もあり、未だ多数の行方不明者が残っているものの、公助の前半部分は十分に機能した。

また、停電の復旧工事に当たった大手電気工事会社のトップ直々の依頼で、燃料も食材も入手困難な状況下（初日の朝は自動車のライトで弁当作りをした）で、採算を度外視して、連日何百人もの弁当を作り続けた仕出し会社。毎日何千着と出てくる自衛隊員の泥まみれの制服を、残業に次ぐ残業で処理し続けているクリーニング工場の従業員など、復興を裏方で支えている多くの人たちが居るのも忘れてはならない。

ここまでは世界中から高い評価をうけた日本である。しかし公助の真価、すなわち政治・行政の力が問われるのはこれからである。特に原発事故という超難問の解決も含めて、国民に勇気と希望を与えられる目標を示し見事に国難を乗り切らなければ、真の力を世界に示したとはいえない。

(2011・5・3)

## 2. 避難所生活からの脱出

50日ぶりに入社してきた社員から聞いた、ひと月余りの避難所生活の一部を紹介する。

その方は、宮城県の沿岸部にあるS町の住人で、津波で家を失い、同地区の「津波防災センター」という施設に避難していた。ここは3年前に3千万円（町、オートレース収益金、住民が1/3ずつ負担）をかけて作ったのだが、この建設は実にタイムリーであったということである。

ここ（S町Y浜地区）は、全280戸のうち、35戸が津波で被災し、津波がきた当日の夜は100人以上がここに避難したが、翌日からは家が無事な人は帰宅したので常時5～60人の避難所として存続し、5月の連休明けに閉鎖して、より大きな避難所に集約される予定という。

被災から1週間は、電気、水道のない生活で、公的な支援物資は何も届かなかった。

しかし、250戸の被災していない家々からは、食料等の物資がふんだんに寄せられたので、食べ物は十分あり、寝具も廃業した民宿から「いくらでもお使い下さい」と提供の申し出があったということで、その間、なに不自由なく暮らせたということである。

ひと月以上も共同生活を続けると、次第にみんなの役割が決まって、いつの間にかその人はみんなのお世話をする立場になってしまった、ということである。

ところが、建設中だった親族の家が完成して、そこに引っ越すことになり、近日中に避難所を出ると告げたところ、「俺たちを置いて行ってしまうのか？」と、非常にさびしがられ、残念がられてしまったということである。

新しいコミュニティーでは自然発生的に新しい人間関係が生じ、頼りにされる人間は、何処でも必要とされるようである。仮設住宅への入居が決まった場合にも、責任者が真っ先に出るわけにもいかず、結局は最後まで残ることになりそうだ。

家も職場も失った人は一日中何もすることが無い。だから職場が無事で、出勤可能な人は周囲に気を使わなければならない。その人の家は幸いにも2階は無事だったので、家財道具を持ち出す作業を3週間かけて行ったが、その間出社できるにもかかわらず会社には出て来られなかったという。

他にも同様な人がいて、その人も作業服姿で通し、きちんとした背広姿で出勤することはしなかったという。このように避難所では服装にも気を使わねばならないのだ。

みんなが同程度に「不幸」であることが、被災所生活者の条件なのである。

(2011.5.3)

### 3. 視察（頑張れない・・・）

あるテレビレポーターが、被災地の避難所を訪れた時のこと、一人の老人に、「がんばれますか？」と問いかけた。その答えは「頑張れない、頑張れません・・・」という言葉だった。

「私は津波で家も家族も全部亡くした。仕事も無い。一体、何をどう頑張ればいいのか？」と逆に問われて、聞いたほうが言葉につまったという。

被災者一人ひとりの事情はそれぞれに違うかも知れないが、普段は当たり前のように使う「がんばってください」という言葉が、なんとも空々しく感じられたという。

連休に入ってボランティア活動とともに、お見舞いや視察も盛んに行われている。

しかし、両陛下のお見舞いならともかく、総理や担当大臣の視察が、「頑張ってください」との声かけだけに終わってはならない。この立場の人たちは、具体的に、何を、どう頑張ればよいのかを被災者にきちんと伝えて、ヤル気を出させるのが真の役割である。

もし、その構想がまだ出来ていないのなら、できるだけ多くの被災者の生の声を聞き、自分自身の頭でその具体案を考えるべきで、そのためには心から相手の話を聞かなければならないはずである。

被災者と会見するとき心が伴っていなければ、相手はしらけてしまう。

自分の窮状を真剣に聞いてくれているか、単なる儀礼で手を握って「頑張ってください」と、笑顔を振りまいているだけなのか、相手は敏感に感じ取ってしまう。

福島県を訪れたとき「もう、帰るのか！」と罵声に近い声を浴びせられた総理の姿からは、真剣に被災者の声を聞き取ろう、という姿が感じられただろうか？

これまでは、我慢強く規律正しい日本人の行動が、威厳に満ちた姿として諸外国から賞賛を受けたが、これからは日本政府の行動が世界から評価される番である。

(2011.5.4)

#### 4. 予知(再)

地震や津波が予知できたら、とは誰もが考えることだ。国の防災方針も、当然のことながら予知を視野にいれている。しかし過去において地震予知は一度も成功した例はなく、かなり研究されてきたが、結局「できる」という結論には達しなかった。

今ではむしろ、予知は難しいからその研究には金をかけず、地震が発生してからの迅速な対応で被害を最小限にとどめ、復興を早く行うという現実的な方向に進んでいる。

従って近年の地震予知研究はほとんど進歩していない。

今回の震災では、これからかなりの予兆現象が報告される事と思われる。津波の予兆でもっとも有名なのは、寺田寅彦や吉村昭の著書にある「豊漁」であろう。大津波の前年から直前あたりまで、沿岸部は例年にない鯛や他の魚の豊漁が続いたと報告されている。

今回の津波の前の漁業事情はどうだったのだろうか？前年に「さんま」の不漁が報道された記憶はあるが、何と云っても前年の暑さ、異常気象の印象しか残っていない。

また明治29年や、昭和8年の時に観察された、異常発光現象、爆発音または大砲のような音をきいたという報告もない。地震と津波の発生時刻が日中ということもあり、まだ明るい時間帯だから発光現象があってもほとんど気づかれず、また今は当時と違って各種騒音も多く、海上からの音を聴けるような状況には無いかもしれない。そして当時は多数報告された、井戸水の濁りと急激な水位低下も最近では生活用水に井戸水を使わなくなったため、指標とはなりにくい。

しかし、これらはすべて「後から気が付く予兆減少」といわれるもので、今回もレポート(1)の前日の液状化のところでも述べたように、その現象から、どこで、いつ、どの程度の地震が発生するか、を予測する事はまったく不可能な事象ばかりである。

動物の異常行動も同様で、たとえ動物が何らかの異常を敏感にキャッチして普段とは違う行動をとったとして、このことから近々地震(その他の異変)があるかもしれないとはいえ、どこで何時、発生するかを言い当てるのは、未だ非科学的占いの世界である。

従って真に科学的予知をするためには、地中に蓄積したヒズミの大きさと範囲を直接的に計測する技術開発が必要である。

また地震発生後に海底が30~50mも水平移動したと報告されているが、このような反発による変動は、継続的に海底地形の測量を正確に行えば、どこにヒズミの蓄積があるか、推定は可能である。

そしてこの移動量の数字が正確なら、毎年10cmのプレートの移動によるヒズミが300年~500年間も累積されたことになり、その間に30~50年間隔でM7.5~8.0の地震でヒズミエネルギーが放出されている傍らで、300年以上にわたってヒズミをため込んでいた部分があるということで、今までのM8.6最大説と地震発生の周期説をもう一度見直す必要がある。

(2011.5.6)